

平成28年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成28年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ハタハタ

学名 *Arctoscopus japonicus*

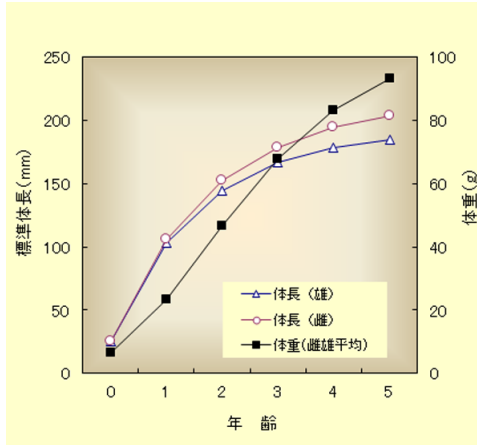
系群名 日本海北部系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 5歳（年齢および年級はふ化した年を起算年として表記）
成熟開始年齢： 雄：1歳（100%）、雌：2歳（100%）
産卵期・産卵場： 12月上・中旬、主に秋田県沿岸の藻場
食性： 端脚類、橈脚類、オキアミ類、イカ類、魚類
捕食者： 大型魚類（マダラ等）

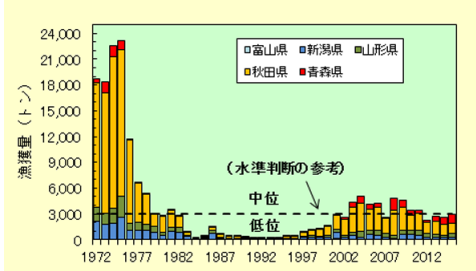


漁業の特徴

秋田県およびその隣県の沿岸域では、12月上中旬に産卵のために接岸したハタハタが定置網、底建て網、刺し網で漁獲されており、それらの漁獲が全体の約5割を占める。一方、青森県～富山県においては、春季や秋季および冬季の産卵期前後に、小型底びき網(小底)、沖合底びき網(沖底)により漁獲される。

漁獲の動向

漁獲量は、2万トン程度あった1970年代前半から1980年代にかけて急激に減少し、1991～1994年は200トン未満となった。1995年からは徐々に増加し、2003年には3,000トン以上にまで回復し、2000年代後半は4,000～5,000トンで推移した。しかし、2012年以降は3,000トンを下回り、2015年は2,998トンであった。県別漁獲量の推移は秋田県を含め同調しており、また秋田県が全漁獲量の5～6割を占めている。ただし、ここ数年は青森県の割合も高くなりつつある。

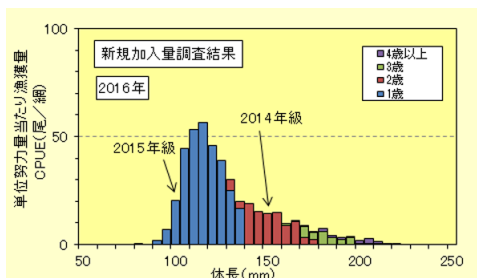
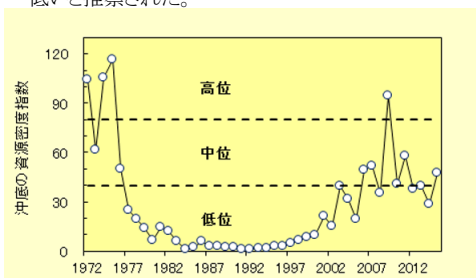


資源評価法

全体の約5割を占める底びき網漁業の漁獲情報として代表性のある沖底の資源密度指数に主に基づくとともに漁獲量も参考として資源状態を判断した。また、調査船による新規加入量調査(4～5月)ならびに漁獲物の体長組成に基づき、近年の年齢組成および各年級の豊度を推察した。

資源状態

沖底の資源密度指数は、1995年以降増加し、2009年には94.7となったが2010年には半減した。2011年以降28～58で推移し、2015年は47.7であった。資源水準の境は、1972～2015年の資源密度指数の最高値およそ120を三等分し、高位と中位の境を80、中位と低位の境を40とした。資源密度指数は2011年から低位と中位の境界の前後で推移している。2015年の資源密度指数は47.7で中位の値であるとともに、2015年の漁獲量は2,998トンで低位と中位の境の参考値とした3,000トンとほぼ同値であったことから、資源水準は中位と判断した。直近5年(2011～2015年)の資源密度指数から動向は横ばいと判断した。新規加入量調査の結果から、2017年に漁獲の主体となる2014年級と2015年級の豊度は低いと推察された。



管理方策

資源水準は中位、動向は横ばいであり、また、2017年に漁獲の主体となる2014年級、2015年級の豊度は低いことから、資源水準を維持するよう現状よりも漁獲することのないよう配慮するべきである。資源水準および資源量指標値(沖底(1そうびき)の資源密度指数)に合わせて漁獲を行うことを管理方策とし、2017年のABCを算定した。

管理基準	Target/Limit	F 値	漁獲割合 (%)	2017年ABC (百トン)	Blimit= —
					親魚量5年後 (百トン)
0.9・Cave3-yr・1.11	Target	—	—	22	—
	Limit	—	—	28	—

- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量。Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の維持が期待される漁獲量
- ABC算定規則2-1)に基づき、ABCは $ABC_{limit} = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ 、 $ABC_{target} = ABC_{limit} \cdot \alpha$ で計算した。係数 α には標準値0.8を用いた
- 中位の水準決定方法を考慮した係数 δ_1 は標準値の0.9、Ctは2013～2015年の平均漁獲量(Cave 3-yr)である2,771トン
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、kは係数(標準値の1.0)、b(4.09)とl(38.5)は資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間(2013～2015年))
- ABCは十トンの位を四捨五入した

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は横ばい
- 2017年に漁獲主体となる2014年級や2015年級の豊度は低い

管理方策のまとめ

- 資源水準を維持するよう、現状よりも漁獲することのないよう配慮するべきであり、資源水準および資源量指標値(沖底(1そうびき)の資源密度指数)に合わせて漁獲を行うことを管理方策とし、2017年のABCを算定した

執筆者: 藤原邦浩・八木佑太・飯田真也・佐久間啓・松倉隆一

資源評価は毎年更新されます。